

てんかん診断ロボ導入

広島大病院 患者負担や手術時間減

てんかんの診断に使うロボットを操作する飯田幸治センター長



広島大病院(広島市南区)は30日、難治性てんかんの治療部位を決める診断にロボットを使うと発表した。MRIなどで診断がつかない場合は脳に電極を付ける必要があり、従来は頭の骨を切り開く開頭手術をしていた。ロボットを用いると電極の棒を刺す位置がピンポイントで

分かり、骨に小さな穴を開けるだけで済む。ロボットの導入は西日本で初。患者の負担や手術時間を大きく減らすことが見込まれる。

てんかんはけいれんや意識消失を起こす大脳の病変で発作をコントロールできない約2割の難治性てんかんの場合、原因となる。診断を踏まえ、脳の部位を切除する際は開頭が必要だが、診断のために開頭をする必要がなくなる。広島大病院てんかんセンターの飯田幸治センター長は「体への負担を大きく減らし、安全性も高い。より多くの患者が切除手術を検討できるようになる」と期待している。(新本恭子)

る脳の部位を切除するケースがある。今月から導入する新しい手法では、ロボットがMRIなどのデータと頭の形状から、十数カ所の電極を刺す位置を正確に示す。ロボットのアームは医師が骨にドリルで穴を開けたり、電極の棒を差し込んだりするのを支援する。乳幼児以外が対象で手術は2時間ほど。保険が適用され、入院費などを除く手術費用は3割負担の場合、約30万円となる。開頭手術の場合は5〜8時間かかり、感染や出血のリスクも高かった。